

図書紹介

図書館企画展示

「ジェンダー」と「ハラスメント」の紹介

片岡 佑介

ジェンダーフォーラム教育研究嘱託

2020年度は新型コロナウイルスの感染拡大によって、今もなお日常のさまざまな局面でこれまでとは異なる対応が強いられています。とりわけ図書館の一時的な閉館や制限つきでの開館は、改めて大学における研究や学習の根幹が書物によって支えられていることに気づかされる機会となりました。ジェンダー・セクシュアリティ関連の書籍を多数所蔵しているジェンダーフォーラムでも、普段であれば立教の学生の方々や時には他大学の学生が本を探しに来所され、ジェンダーなどに関する身近な話をするきっかけになっていました。ところが今年度は、コロナの影響により、それが叶わない状況が長く続いています。

こうしたゆっくりと書架を巡ることが難しい状態を踏まえ、2020年10月26日（月）より、大学図書館の主催および人権・ハラスメント対策センターとの共催で、企画展示「ジェンダー」と「ハラスメント」を実施しました（12月下旬までは池袋図書館、2021年1月からは新座図書館にて展示）。この展示では、ジェンダーやセクシュアリティ、ハラスメントに関して、初学者への手引きとなるように、入門書やフォーラム所員・運営委員のお勧めの一冊を紹介しました。また、WEB上でも下記に挙げる書籍のリストやフォーラムの活動を紹介するポスターを公開しています。

昨年の公開講演会で上野千鶴子先生が仰っていたように、本を読み、学ぶことは、単に知識を吸収するだけに留まらず、まだ言葉にできていない

自分の中のモヤモヤした感情や体験を、言語化して把握できるようにする行為だといえます。特にジェンダーやセクシュアリティのような日常生活と切っても切り離せないにもかかわらず、うまく言い表すことのできない事態に直面することの多い領域にとって、読書はとても重要な実践ではないでしょうか。近年、ジェンダーやセクシュアリティに関する分野で、読書をテーマにした本が次々と刊行されています。例えば、原ミナ汰／土肥いつき編著『にじ色の本棚：LGBTブックガイド』（三一書房、2016）や、柳原恵『〈化外〉のフェミニズム：岩手・麗ら舎読書会の〈おなご〉たち』（ドメス出版、2018）、あるいは北村紗衣『シェイクスピア劇を楽しんだ女性たち：近世の観劇と読書』（白水社、2018）などの本は、読書という行為が個人的なものであると同時に、ほかの人たちと共に読み、楽しみ、語り合うことを通じてコミュニティを生み出すものでもあるということ、そしてただ一方的に情報を得るだけでなく、時にあるテキストの既存の解釈をゆさぶり、新たな読みの地平を切り開くスリリングな体験でもあることを気づかせてくれます。

来年度がどのような状況になるのか、今はまだ予測を許さない事態が続いていますが、今年のフォーラムのイベントで活用したさまざまなオンラインツールなども駆使しつつ、来年度は本を通じたフォーラムでの交流が再び活発になることを願ってやみません。

ジェンダーフォーラム推薦書

- イ・ミンギョン『私たちにはことばが必要だ——フェミニストは黙らない』すみみ／小山内園子訳、タバックス、2018年
- 上野千鶴子『女ざらい——ニッポンのミソジニー』紀伊国屋書店、2010年／朝日新聞出版社、2018年（文庫版）
- 小倉千加子『草むらにハイヒール——内から外への欲求』いそっぶ社、2020年
- 加藤秀一『はじめてのジェンダー論』有斐閣、2017年
- 金子雅臣『壊れる男たち——セクハラはなぜ繰り返されるのか』岩波書店、2006年
- 北村紗衣『お砂糖とスパイスと爆発的な何か——不真面目な批評家によるフェミニスト批評入門』書肆侃侃房、2019年
- サドカー、マイラ&デイヴィッド『「女の子」は学校で作られる』川合あさ子訳、時事通信社、1996年
- スコット、ジョーン・W.『増補新版 ジェンダーと歴史学』荻野美穂訳、平凡社、2004年
- スタル、ステファニー『読書する女たち——フェミニズムの名著は私の人生をどう変えたか』伊達尚美訳、イースト・プレス、2020年
- 千田有紀／中西祐子／青山薫『ジェンダー論をつかむ』有斐閣、2013年
- ソルニット、レベッカ『説教したがる男たち』ハーン小路恭子訳、左右社、2018年
- 竹信三恵子『家事労働ハラスメント——生きづらさの根にあるもの』岩波書店、2013年
- バトラー、ジュディス『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』竹村和子訳、青土社、1999年
- 一橋大学社会学部佐藤文香ゼミ生一同著、佐藤文香監修『ジェンダーについて大学生が真剣に考えてみた——あなたがあなたらしくいられるための29問』明石書店、2019年
- 平山亮『介護する息子たち——男性性の死角とケアのジェンダー分析』勁草書房、2017年
- 堀江有里『レスビアン・アイデンティティーズ』洛北出版、2015年
- マッケン、ハンナほか著『フェミニズム大図鑑』最所篤子／福井久美子訳、三省堂、2020年
- 森山至貴『LGBTを読みとく——クィア・スタディーズ入門』筑摩書房、2017年

過去のジェンダーフォーラム事務局スタッフによる著書

- 黒岩裕市『ゲイの可視化を読む——現代文学に描かれる〈性の多様性〉?』晃洋書房、2016年
- 嶽本新奈『「からゆきさん」——海外〈出稼ぎ〉女性の近代』共栄書房、2015年
- 中村江里『戦争とトラウマ——不可視化された日本兵の戦争神経症』吉川弘文館、2018年

小説・絵本

- 村田沙耶香『消滅世界』河出書房新社、2015年
- フレミング、ジャッキー『問題だらけの女性たち』松田青子訳、河出書房新社、2018年
- ブーレグレン、サッサ『北欧に学ぶ小さなフェミニストの本』枇谷玲子訳、岩崎書店、2018年

映画

- エプスタイン、ロブ／フリードマン、ジェフリー『セルロイド・クローゼット』（1995）
- 松井久子『何を怖れる——フェミニズムを生きた女たち』（2014）

書評

■ 堀江有里『レズビアン・アイデンティティーズ』洛北出版、2015年

社会学、レズビアン・スタディーズとクィア神学の専門家である堀江は、「レズビアン」としての理解にアイデンティティ・ポリティクスというメスを刺し、自分の中に隠されていた未完の可能性を発見し、肯定していく。

ゾントーク、ミラ（ジェンダーフォーラム副所長／文学部キリスト教学科教授）

■ 金子雅臣『壊れる男たち——セクハラはなぜ繰り返されるのか』岩波書店、2006年

「なぜセクハラは無くならないのか？」と少しでも疑問に思ったことがある方はぜひ本書を読んでみてください！「加害者の言い分」を読み進めると「男が悪い、女が悪い」では片付けられない根本的な社会問題が見えてきます。

金儒振（ジェンダーフォーラム運営委員／国際センター）

■ 一橋大学社会学部佐藤文香ゼミ生一同著、佐藤文香監修『ジェンダーについて大学生が真剣に考えてみた——あなたがあなたらしくいられるための29問』明石書店、2019年

ジェンダー論を学んでいるけれど、友人たちからの疑問にすっきりと答えられないもやもやを抱えている学生たちが、皆で話し合っどう答えたらよいかを真剣に考えて書いた本です。ポップ・ステップ・ジャンプと三段階で解説されているので、ジェンダー論が初めての人にも、すでに学んでいる人にも役に立ちます。

横山美和（ジェンダーフォーラム事務局）

■ スコット、ジョーン・W.『増補新版 ジェンダーと歴史学』荻野美穂訳、平凡社、2004年

ジェンダーを「肉体的差異に意味を付与する知」と定義づけ、セックス／ジェンダーの二分法を見直し新たなジェンダー概念を提示しました。バトラーと合わせて読みたいですね。

横山美和（ジェンダーフォーラム事務局）

■ 平山亮『介護する息子たち——男性性の死角とケアのジェンダー分析』勁草書房、2017年

一見、介護の専門書のように見えますが、介護を通じて「息子としての男性」、すなわち男性の自立／自律に隠された無自覚な依存の問題を抉り出しています。近年、大注目の男性学の研究者である著者の言葉に、時折ギクッとしながら頁を捲りました。

片岡佑介（ジェンダーフォーラム事務局）

